
小児保健看護

報告者：上原 和代

教育及び実践の課題

小児保健看護では平成 22 年度から、3 年次後期に展開する小児保健看護実習Ⅱに先立って小児看護技術の客観的臨床能力試験 (Objective Structured Clinical Examination: OSCE) を行ってきた。学生は前期中に小児看護各論と技術演習を学び、夏季休暇中に各自で技術練習を行い、試験を受ける対策をしていたが学生個々の技術習得過程における支援が十分でないことが課題であった。

平成 25 年度の新カリキュラムから、3 年次へのシミュレーション学習の導入を検討したが、国内のシミュレーション学習(教育)、特に小児に関する報告は見当たらなかった。看護基礎教育でどのようにシミュレーション学習が展開されているかを先進地域であるアメリカを中心に海外文献からヒントを得たいと考えた。

活用した論文の概要

Mahoney ら(2012)は、看護学士課程の学生へ小児急性期ケアにおける高再現性シミュレーターを用いたシミュレーション教育の効果の調査結果を報告している。準備した 4 つのシナリオシミュレーションに参加した学生は 133 名で、学習目標の到達度を 5 段階中 4~5 とした者が 8 割、効果があったとした者は各シナリオで 9 割あった。また質的なデータの結果は、圧迫感の少ない環境で楽しめた、成績を心配しなくてよいことが学習を促進した、子どもへの看護に気が楽になったなど肯定的であった、という。彼らは小児看護の学士課程において高再現性シミュレーターによるシミュレーション教育は効果的であったと結論づけ、学生のアウトカムがシミュレーション教育の影響を受けるかさらに検討することが必要であると述べた。

教育及び実践への活用

本学の小児保健看護演習(3 年次、必修 1 単位)は各クール 18~24 名の学生が後期中に 4 クールに分けて履修する。月曜日から金曜日までの 5 日間に配置された 15 回の演習はペーパーペイシエントを用いた看護過程の展開、小児看護技術、シミュレーション学習から構成され、このうちシミュレーション学習は火・水・木曜日に各 1 回、6~8 名 1 グループの少人数で学習する (表 1)。シナリオは週明けからの実習で学生が出会いやすい場面をこれまでの実習実績を基に教員間で検討した。結果、シナリオは呼吸器疾患で入院した幼児期の子どもとその家族で連続した展開とし、入院当日に学生が受け持ちを開始する設定とした。各シナリオアウトラインとデブリーフィング案を作成した段階で学外のシミュレーション学習の専門家からスーパーバイズを受け修正し最終的に各シミュレーションのテーマは、1) 子どもの状態に合わせた情報収集、2) 子どもの状態に合わせた対応、3) 入院中の子どもの環境調整、となった。

今年度はシミュレーション学習の効果と次年度に向けた教育内容の改善を目的に、各演習期間と実習終了後に履修生を対象とした調査を行っているところである。

参考文献

Mahoney, A.E.D. et al. (2012): Using high-fidelity simulation to bridge clinical and classroom learning in undergraduate pediatric nursing, Nurse Education Today.
